

今年3月、マリさん（アサヒ精版印刷社長、築山万里子さん）が手掛けた“大作”が出来上がった。ピンホールカメラで撮影した写真集「WIND MANDALA」だ。縦横31センチ、厚さ3センチというサイズや、1冊1万3000円という価格もさることながら、つぎ込んだ手間が半端ないのだが、そこを説明する前に、まずは写真集を楽しみたい。

ピンホールカメラは、私たちが手にするカメラとは全く違う。そもそもレンズがないし、4キロもある重くて大きい箱だ。その箱に針が通るくらいの小さな小さな孔が開いていて、そこから入る光で被写体の像をフィルムに結ぶ。だから光量が少ないため撮影に時間がかかる — という理屈をいくら説明してもピンとこないと思うので、作品を見よう。

もう30年、ピンホールカメラを担いで、日本だけでなく世界各地を撮影行脚しているアーティストの鈴鹿芳康さん（71）＝京都在住＝は、こう言う。

「おれが撮ったというより、撮らせていただいた。縁なんだよね」

目の前に見えているものを瞬間で切り取るレンズカメラと違って、ピンホールカメラは時に1時間以上も、目の前の景色を取り込み続ける。画像がボワーンと丸いのは、ピンホール（小さな孔）の形だ。北海道・サロベツで撮った写真①は「マイナス20度以下だと思う。吹雪で、波がバシャーンて。太陽が4、5分だけ出た」。この幻想的な写真が、そんな過酷な環境に身を置いて撮られたとは、とても想像できない。

青森・大間での写真②は、「光の奇跡」と評する。着いたのが遅くて夕日を見逃したが、暗くなるまで三脚を立てて撮影した。まったく太陽は見えなかったのに、現像すると沈む太陽の光が雲に反射していた。

目の前に見えている景色ではなく、いわば時間の流れをフィルムに焼き付ける。あるいは光、風、雲の流れを……。砂浜でカメラの前を歩いたら、自分の姿は写らずとも、足跡はくっきり残っている。どんなものが撮れるかは、現像するまでわからない。なぜなら、自然がどんな流れを見せるかは予測がつかない。だから“縁”。

「自分にはどうにもならないところで生かされてるんなら、任せる。それで死んだらしようがない」。ほんとに3回くらい死にそうになった、と鈴鹿さんは笑う。いつ、どこに行くのか決めるのも、独特の流儀がある。易で使うぜい竹と旧暦の暦で、いい方角を決める。自然、地球、宇宙に自分を委ねているのだ。そんな日本一周の旅はいま、2周目に入っている。

ピンホールカメラ独特の色彩の微妙な変化、グラデーションをどう紙に再現するか。ここからがマリさんの仕事だ。



「Sarobetsu, Hokkaido, Japan 1992」

写す時の流れ す冒険

晴レ
ルデ



「Oma, Aomori, Japan 1998」

